

外来・入院患者ならびに地域住民を対象としたお薬セミナー ～医薬品適正使用の推進における薬剤師の社会貢献の評価～

092A82 長谷川 直樹

医療薬剤学講座

【目的】

高齢者は生活習慣病など慢性疾患の罹患率が高い。しかし、加齢に伴う生理機能や認知機能の低下は個人差が大きく、年齢から画一的に薬物投与量を設定した結果、服用薬剤による副作用が発現しやすく、長期化・重篤化することも多いとの報告がある^{1,2)}。財団法人日本医療機能評価機構の「医療事故収集等事業平成21年年報」³⁾によると、報告義務対象医療機関から報告された医療事故の約2/3は60歳以上の患者が占め、そのピークは70歳代の患者にあることが示された。その要因のひとつとして加齢に伴う生理機能の低下によって多種多様な医薬品を適正に服用・管理することが困難になり、不適切な薬剤使用によって薬物有害作用の発現頻度を上昇させていると推測される。高齢者の不適切な薬剤使用の原因のひとつとして、薬剤に関する基本的な知識が不足していることにあると考える。そこで、西本病院（以下、当院）では、薬剤師の果たすべき役割である医薬品適正使用の一環として外来患者を中心とした地域の高齢者を対象とした薬剤の基本的な管理、服用・使用方法、トラブル時の対処方法などに関する公開集合教育"西本病院お薬セミナー"（以下、セミナー）を2009年より開催した。今回、このセミナーの学習効果をセミナー受講前後の受講者の薬剤に関する知識の変化を解析し、セミナーの教育効果を評価した。

【方法】

セミナーは、まず薬剤師によって受講者の基本的な薬剤関連知識について確認作業を行った後、確認項目に沿って約1時間の説明を実施した。紙芝居などの小道具や資料を用いた解説に加え、薬剤師からの薬剤に関する簡単な質問に対して受講者が小道具を用いた実演で回答する受講者参加型のセミナーとした。セミナー終了時にセミナーに対する満足度をアンケート方式で調査した。さらに受講約2週間後に受講直前と同一の確認表を用いて知識の確認作業を行った。セミナー受講前後の確認項目の正解率を比較することにより、セミナーによる学習効果

について評価した。

【結果】

セミナーに対する評価は、受講者61名のうち受講後確認表を回収できた48名を対象として実施した。セミナーの理解度は、「非常に分かりやすかった」68.8%、「分かりやすかった」29.2%とほとんどの受講者が理解できたと回答した。しかし、「半分くらい分かった」と回答した受講者が1名いた。有用度については、「非常に役に立つと思う」60.4%、「役に立つと思う」39.6%とすべての受講者が役立つと感じていた（図1）。受講2週間後における受講者の平均正解率は74.4%で、受講直前の平均正解率58.5%と比べ、有意に上昇した（図2 $p<0.01$ by paired t test.）。

【考察】

高齢者が適正に薬剤を使用できるようになるためには、薬剤に関する基本的事項を正しく身につけることが必要となる。そのためには、自らが学習することが重要であり、個別相談・指導よりも友人や仲間、同世代の人たちと一緒に学習できる集合型教育が有効であると考えられた。今回実施した公開セミナーでは、紙芝居や冷蔵庫などの模型を使用することにより、適正な薬剤の使用法や保管方法を視覚・聴覚の両方に訴え、さらに模擬体験させて高齢者でも理解しやすく、記憶にとどめやすいように工夫した。現在、西本病院で実施しているセミナーは、高齢者が薬に関する正しい知識を仲間とともに楽しみながら理解するのに有用な方法であると考えられる。このお薬セミナーを継続し、当院の患者を含む近隣住民への適正な医療情報の提供の場と発展させていきたいと考える。さらに、今後、増大する在宅医療においては在宅患者と介護者に適切な方法で医薬品適正使用を推進したい。

図1 西本病院お薬セミナーの満足度 (n=48)

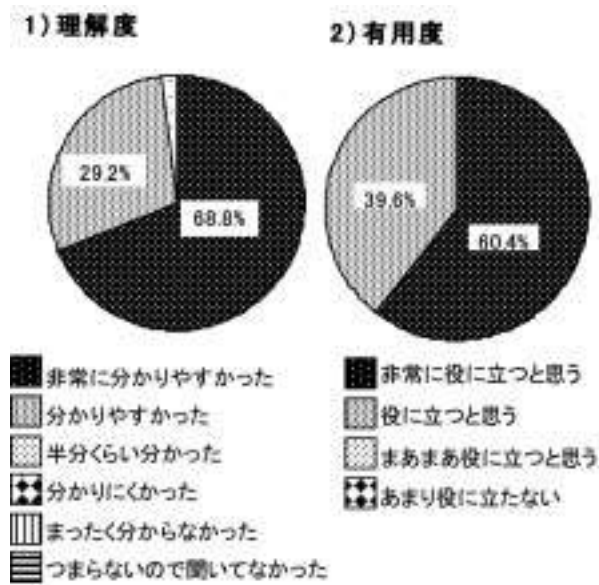
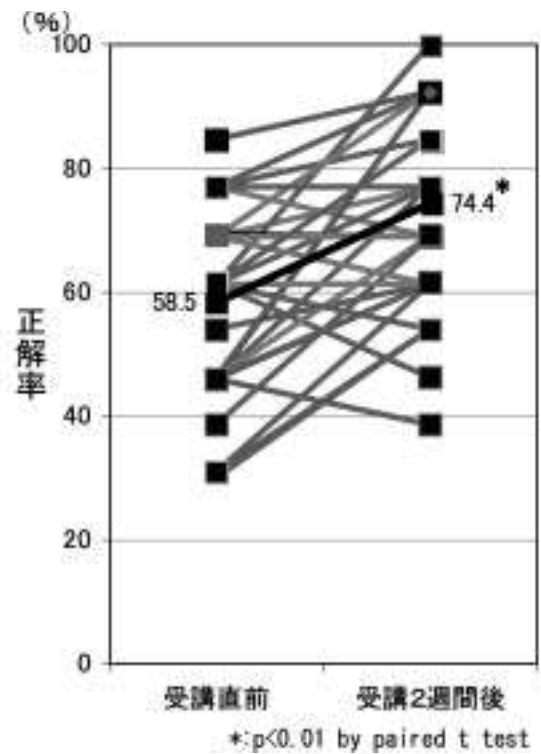


図2 西本病院お薬セミナー受講者の医薬品に関する基本的知識の変化 (n=48)



〔引用文献〕

- 1) 秋下雅弘：高齢者における安全な薬物療法のポイント、日本医事新No.4381、2008年4月12日
- 2) 鳥羽研二，秋下雅弘，水野有三，江頭正人，金承範，阿古潤哉，寺本信嗣，長瀬隆英，長野宏一朗，須藤紀子，吉栖正雄，難波吉雄，松瀬健，大内尉義：老年者の薬物療法 薬剤起因性疾患、日本老年医学会雑誌 36巻3号、181-185、1999.03
- 3) 財団法人日本医療機能評価機構：平成22年8月31日 医療事故収集等事業平成21年年報、http://www.med-safe.jp/pdf/year_report_2009.pdf